図書館だより

No.77　December, 2010

目　次

巻頭エッセイ　インターネット依存症になってはいませんか？　・・生物応用化学科　渡邊　勝宏・・1
読書のすすめ　柳田邦男著「マッハの恐怖（正・続）」　・・・・・・・・機械工学科　和泉　直志・・2
司馬遼太郎著「竜馬がゆく」　・・・・・・・・・・・・・・・一般理科　宮本　久一・・3
私の一冊　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・各学科学生６名・・・4
リレー連載「古典への誘い」　藤沢周平の時代小説　・・・・・・・・・・一般文科　赤塚　康介・・6
平成２２年度ブックハンティング（夏季）の報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
平成２２年度前期図書館利用状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Information 編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Kurume National College of Technology library
久留米工業高等専門学校図書館

巻頭エッセイ

インターネット依存症になってはいませんか？

生物応用化学科　渡邊　勝宏

「困ったなあ。図書館だよりの巻頭エッセイなるものを書かねばならないらしい。どうしよう？」と焦ってみるも、「まあどうにかなるやろ！」で数日経ち、締切直前にまだ書けていないと慌てふためく．．．レポートの締切に追われ、慌てふためく学生さんの様だが、普段偉そうなこと言っている、とある専門学科の教員も、裏を返せばこのレベルである。猛省を促されるべきである！

さて、これまで30数年間生きてきた中で、これまでどんな本と出会ってきたのかなあと振り返ってみたい。どちらかというと読書好きな少年だったように思える小学生時代、江戸川乱歩著「少年探偵シリーズ」（ポプラ社刊）で推理小説に目覚め、「学習まんが　少年少女日本の歴史」（小学館刊）で歴史に興味を持ち、中沢啓治著「はだしのゲン」で平和の尊さを学ぶ．．．学校の図書室だけでは満足いかず、公立の図書館にあくせく通っていろんな本を読んだ。中学時代は、西村京太郎著「トラベルミステリー」シリーズ」を好んで読んだ。推理小説を読むだけでは満足いかず、十津川警部になりきり、時刻表片手に九州各地を鉄道で旅した。今となっては楽しい思い出である。中学卒業後はというと、「これだ！」という本に出会えた覚えがない。というより、部活や遊びに忙しく、読書をするということを忘れていた気がする。大学に入り研究が忙しくなると、いつしか本は、わからないことを調べるものに変わっていた。購入する本も文芸書や推理小説ではなく、専門書へと変わっていった。「専門書は読破するというわけではなく、どこに何が書いてあるかをきちんと整理し、理解に努めなさい！」大学時代の恩師から輪講・雑誌会を通じて学んだ教えである。

ちょうど今から10数年前、小生が大学在学中は、インターネット環境の飛躍的な拡大時期でもあった。ウェブコンテンツも充実してきた時期である。NTTのてれほーだいも相成って、夜な夜なネットサーフィンする人々が増え、私の周りにも研究室に出てこなくなる人間が数名いたりと、多くの人々にとって大変魅力あるものの一つとなっていった。

このインターネット、確かに便利なものであることは重々承知している。メールを通じて瞬時に相手とやり取りできる。わからないことでもキーワードを入れて検索すれば瞬時に情報が得られる。お金も扱えるし買い物もできる。最近では、小説やマンガも一つのコンテンツとして見ることができるらしい。でも、誤った使い方をすれば被害者にもなるし加害者にもなる。学生の皆さんも情報系の授業を通じてそんなことを教わっていると思う。

で、前述の、レポートの締切うんぬんの話に戻そう。レポートを通じてもっと深く知ってもらおうと出題したはずなのに、その回答はどう見てもネットからコピペしてきたね？というレポートが増えていると感じるのは小生一人ではないだろう。手書きでレポート書いて来いと言ってもそのままネットの内容を映しただけというのもある。たくさんの科目を受講している以上、たくさんレポートが科せられていて、大変なのは理解できる。でも、やっつけ仕事で本当にいいのだろうか？

小生もネットを通じていろいろな情報を仕入れている一人である。しかし、毎日の日課で欠かさないこと、それは新聞を読むことである。ネットで最新の記事を見ることができるのになぜ故？

ネットの記事にはなく、活字版にあるもの、それは、数値データである。日本の新聞には数値データが多いというのは世界的に有名な話らしい。小生、野球の仕事に携わっているので、野球の試合の記事に例えるならば、多くの人は好きなチームの勝敗に一喜一憂しても、チームの安打数がいくつで、残塁がいくつで、投手の自責点がいくつで、防御率がいくつでとかどうでもいい話かもしれない。でも、新聞にはちゃんと盛り込まれている。その記事を作成するうえで、公式記録員は、「野球規則」という書物だけに照らし合わせて間違いがないように記録をとり、記者は記事にする。配信はネットを通じて即座に行くかもしれないけれども．．．何でも即座に答えてくれるネットに頼らず、たまには本を熟読して自分の答えを見つけてみるのもどうでしょうか？

特集 読書のすすめ

柳田邦男著「マッハの恐怖（正・続）」

機械工学科　和泉　直志

昭和41年(1966年)の日本の空は異常であった。2月４日、千歳発羽田行き全日空B727が東京湾に墜落、乗員乗客133人全員が亡くなった。１カ月後の3月4日夜、香港発のカナダ太平洋航空DC-8が濃霧の羽田空港で着陸に失敗し滑走路端で大破炎上、乗員乗客72名のうち64名が亡くなった。翌日の3月5日、前夜の残骸の横を離陸した羽田発香港行き英国海外航空B-707が富士山付近で空中分解して墜落、124名全員が亡くなった。さらには11月13日、大阪発の全日空YS-11が松山空港でいったん接地した後、着陸やり直しのため上昇中に高度を失い空港沖に墜落、50名全員が亡くなった。

全日空羽田沖事故は我が国初のジェット旅客機事故で、亡くなった方の数からは当時史上最悪の航空機事故であった。また、カナダ太平洋航空機事故は外国航空会社による国内での初めての事故、YS-11の事故は戦後初の国産旅客機の事故であった。

柳田邦男氏の「マッハの恐怖（正・続）」はこれらを含む幾つかの航空機事故の原因究明の過程を描いたノンフィクションである。残念ながら御巣鷹山の日航ジャンボ機墜落事故など航空機の事故はその後も発生しており、多くの本が書かれている。本書はそれらの先駆けとなったもので、出版からすでに四十年近くを経ているが決して古さを感じさせない。

その一つは、柳田氏が事故発生の経過をあたかも推理小説の謎解きのように読者に示していくからである。カナダ太平洋航空機事故では、着陸直前に機体が異常とも言えるような大きな降下を行い滑走路手前の海上の進入灯に車輪を引っかけたものであった。柳田氏は専門家による事故調査委員会の報告書をはじめとして綿密な取材をもとに、①ベテラン機長ほど手前に着地しようとする傾向がある、②交信記録から機長の関心はすでに着地後にあった、③それまで機長は管制官の指示に対して極めて的確に機体をコントロールしていた、④高度の記録にあるような降下のためには操縦桿の大きな操作が必要であったことなどを示して、ベテラン機長が視界確保と雨中でのオーバーランを嫌ってなるべく手前に着地するために、自身の意志として降下させたものであることを鮮やかに描き出している。

英国海外航空機事故は、富士山の風下側で発生する乱気流に遭遇したことによるものと結論づけられた。当日の天気図や雲の衛星写真から乱気流が発生しやすい状況にあったこと、胴体内の燃料が隔壁を破って胴体前方に流出していたことから、乱気流により機体を減速する向きに大きな力が作用したことが推測された。事故調査委員会は乗客が事故発生時に撮影していた８ミリフィルムのコマ送りの乱れに注目した。そして、これを実験で再現してカメラに働いた加速度を推定し、機体強度を超える力が機体にはたらき破壊したことを明らかにしたのである。

これらの謎解きが明快であったのに対し、羽田沖事故と松山沖事故は事故調査委員会において原因不明とされた。操縦者が亡くなり物証が残骸となる航空機事故では、遺された証拠がひとつにつながり明確なストーリーが構成される場合の方が稀ということであろう。

これに対し、羽田沖事故では①第三エンジンの消火レバーが引かれた痕跡があった、②第三エンジンが機体と離れたところで発見された、松山沖事故では①左プロペラ４枚のうち１枚が離れた場所で見つかった、②この１枚の根本にあるピッチ調整機構に疲労破壊の兆候があった、③このプロペラは異常振動等で過去に３回分解点検を受けていた、など機材の不具合の可能性を示す事象があったことを柳田氏は指摘したうえで、いずれの事故についても「事故原因に関連する不具合が発生していたことを示す証拠はなかった」とパイロットミスを匂わせながら「原因不明」とした委員会の姿勢に疑問を呈している。

一方、柳田氏はパイロットミスの本質にも言及している。すなわち、ミス自体を責めるよりそのミスがなぜ起こったか、システム的背景を明らかにして、それを起こさせない仕組みを作っておくことが事故防止には重要であると述べている。個人の注意力に頼る安全対策では限界があるというこの指摘は、今でも十分に現代的である。

特集 読書のすすめ

司馬遼太郎著「竜馬がゆく」

一般理科　宮本　久一

９月に愛媛県松山市から赴任してきました。
私は、司馬遼太郎の作品が好きで、よく読むのですが、今回は、数ある作品から前任地の四国にちなんで歴史長編小説「竜馬がゆく」をお奨めしようと思います。

坂本龍馬というと、誰しも一度は名前を聞いたことがある人物だと言っても過言ではないでしょう。

今年は特にNHKの大河ドラマで「龍馬伝」が放送されたことによる空前の龍馬ブームで、龍馬自身もかなりクローズアップされています。

出身地である高知では、龍馬にちなんだ様々なイベントを行い、おおいに盛り上がっているようです。高知県にもたらす経済効果は400億円以上ともいわれ、その人気ぶりはかなりのものだということがわかります。

興味深いことに、明治維新後、何度か龍馬ブームが起こったらしいのです。ただ、それは土佐や軍が、龍馬の成し遂げてきたことを政治的に利用した事によるものでした。

現代において、坂本龍馬の知名度を飛躍的に上げ、はじめて龍馬ブームを起こしたのが司馬遼太郎が書いた、この「竜馬がゆく」であり、これによって現在一般的にイメージされている龍馬像が確立されたと言われています。私自身もこの小説を読んで坂本龍馬に興味を持ったひとりです。

この作品は、文庫本で8巻にもなるので、読むにはかなりのボリュームですが、坂本龍馬が生まれてから33歳の若さで暗殺されるまでが丁寧な取材に基づいて書かれています。

また、龍馬が生きた幕末期という背景や勝海舟・西郷隆盛・桂小五郎などといった明治維新に深く関わった人物達との交流も詳しく描かれているので、幕末史を知る上でもとてもおもしろく読めるのではないかと思っています。

龍馬が活躍した幕末期という時期は複雑で、説明するのが難しいのですが、幕府の権力にもかげりが見え始め、日本が鎖国をあきらめ開国に踏み切るなど歴史的に大きな節目を迎えた時期であったといえるでしょうし、日本という国がどのような方向に向かって進んでいくのかわからない混迷の時期であったともいえるでしょう。

このような大きな歴史の波の中で、坂本龍馬は土佐藩を脱藩した浪人でありながら薩長同盟、大政奉還などの歴史的な大事件に深く関与していくのです。

私自身は龍馬があまりに美化されすぎるのは賛成できません。しかしながら、龍馬が、藩という単位ではなく、既に日本という国の将来を考え、新しい日本を造ろうとしていたことなどから感じられる先を見る力や大きな視野には感心します。

また、そのために命の危険が身に及ぶことを承知しながらもまっすぐに突き進んでいった龍馬の生き方も多くの人を惹きつけているのではないかと思います。

今、日本はグローバル化の波にさらされています。人ものも経済も地球規模で流動する時代になってきました。これもまた激変の時代といえるかもしれません。また、日本の進むべき方向も定まらない混沌としたこの時代は、龍馬の生きた幕末期と似ています。

龍馬が今の世の中を見たら何というでしょうか。そしてどのように導いてくれるでしょうか。

高知市の桂浜に建っている坂本龍馬の銅像は、大きく果てしなく広がる太平洋の先を見つめています。
その姿はまるで自分の前に広がる無限の可能性と大きな夢を見すえているかのようでもあります。

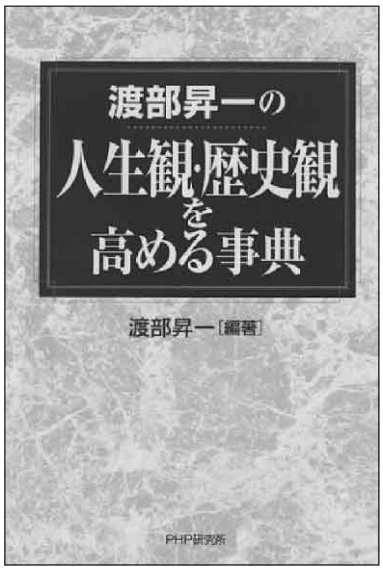
龍馬のみならず「竜馬がゆく」に出てくる他の登場人物たちもまた、ひとりひとりが、それぞれの理想を持って一所懸命に考え、ひたむきに生きています。

そういう人々のパワーを感じられる本なので、私にとっては読むと力が湧いてくる本です。興味があれば読んでみて下さい。

また龍馬に関する本はたくさん出ていますので読み比べてみるのも興味深いかもしれません。

私の一冊

渡部　昇一　著
渡部昇一の人生観・歴史観を高める事典　　PHP研究所



英語学を専攻する著者であるが、その研究・評論の分野は多岐にわたり、英国学や日本史、現代の経済に関することにまで及ぶ。膨大な蔵書を誇る現代の知的巨人による「自分とは何か」「日本人とは何か」というアイデンティティへの答えが、数多くの書籍の紹介と共に凝縮された一書。この書を開く度に新たな発見があり、国際社会のきな臭さに接する昨今において、正しい歴史認識とは何かを考えさせられる。自己啓発書としても、著者の体験をまじえた具体的な例や偉大な思想家達の教えに読み応えは充分である。知識人への道、あるいは高度な仕事術を教示する、文明牽引の気概を持って知的青春を送る学徒必携の書である。

（機械工学科５年　増山　雄亮）
【図書館所蔵情報】　◇購入予定

森　博嗣　著
すべてがFになる　　講談社

本作は著者が工学者である事から、よく理系ミステリーと形容される。理系ミステリーというだけあって綿密な構成やしかけ、工学的知識がふんだんに盛り込まれており、従来のミステリーとは様々な点で一線を画している。この小説が一際異彩を放っている理由の一つとして、何気ない会話や動作の中から、作者の研究者としての倫理観や価値観、研究に対する姿勢を伺う事が出来る点にあると私は考える。またタイトルも秀逸で、この一見意味不明な文にこの小説の本質が隠されているのである。

従来の型の小説に飽きてしまった方に、ぜひこの作品を勧めたい。

（電気電子工学科４年　見良津　黎）
【図書館所蔵情報】　９１３‖Ｚ－Ｍ‖３

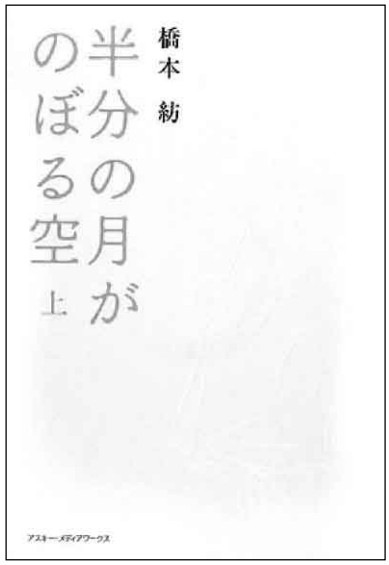
ジュール・ヴェルヌ　著　　荒川　浩充　訳
海底二万里　　創元SF文庫

著者のジュール・ベルヌは作品の中に科学技術を織り交ぜ現実性を高める方法に着目し、現代ではSFの父と評価されるに至った作家である。本作が発表されたのは1869年であるが、当時は実現していなかった潜水艦等の科学技術が登場する所為かそれほど時代を感じさせない作品となっている。逆に当時の時代背景を考慮しながら本作を読むことでベルヌの未知科学に対する発想力の特異さや、物語に隠された進んだ技術が人を幸せにするわけではないといった視線を感じ取ることが出来るだろう。やや冗長な専門的解説もあり取っ付き難いと思われる部分もあるかもしれないが是非読んでみて頂きたい１冊である。

（制御情報工学科３年　瀬口　照大）
【図書館所蔵情報】　ｏ－ｂ‖５１０‖３

私の一冊

橋本　紡　著
完全版 半分の月がのぼる空　　アスキー・メディアワークス



伊勢市の病院を主な舞台とした、高校生の裕一と不治の病を患う同い年の里香との恋を描いた小説です。

作中には、たびたび実在の書籍名が登場します。そして、その書籍―その本にまつわる思い出や登場人物の台詞―が物語を動かすうえで重要な役割を果たします。

様々な本や騒動、そして里香を他の人より確実に早く死に追いやる病気の進行。それらによって変化していく二人の「死」に対する心境。それらを追ううちに思わず心から二人の時間が長く続くことを願ってしまいたくなる作品です。

（生物応用化学科５年　林田　竜至）
【図書館所蔵情報】　◇購入予定

乙一　著
暗黒童話　　集英社

この学校出身の作家さんで、私たちの先輩に当たる乙一さんの作品は、学校の図書館にもたくさん置いてあります。その中でも、「暗黒童話」はある作家が書いたとされる悲しい結末の絵本と不思議な目を持つことになった少女のお話です。事故で片目を失い、さらに記憶まで失った少女は、眼球移植をします。移植されたその目は、やがて現実とは少しずれた世界を映し出すようになり物語が進行していきます。また、物語の途中で、両目のない少女とカラスの悲しいお話も出てきます。これ一つでも十分面白く悲しいお話なのですが、この話も物語とつながっていきます。これ以上言ってしまうと、ネタバレになってしまいますので……。

（材料工学科5年　樺島　怜）
【図書館所蔵情報】　９１３‖Ｚ－０‖４　他

サンテグジュペリ　著　　池澤　夏樹　訳
星の王子さま　　集英社文庫

「大切なものは、目に見えない」この台詞は私がこの本で一番印象に残っている台詞です。この本は当初児童書として出版されましたが、子供の心を忘れかけた多くの大人達に支持され、世界中で100以上の言語に訳されている不屈の名作です。砂漠に不時着したある飛行士と、ある小惑星から地球に流れついた星の王子さまが主な登場人物で、ゆっくりとした時間の流れで繰り広げられる２人のほのぼのとしたストーリーです。可愛い挿絵も入っており、本が苦手な人でも読みやすいと思います。

この作品は読者にどんな困難にも立ち向かえる勇気を与えてくれる凄い本です！読んだことのない人は是非一度読んでみて下さいね！

（専攻科物質工学専攻１年　筒井　あかり）
【図書館所蔵情報】　９５３‖Ｓ‖１０　他

リレー連載「古典への誘い」

藤沢周平の時代小説

一般文科　赤塚　康介

「古典への誘い」ということで、文書を依頼されましたが何を書こうかと迷っています。以前、この図書館便りに文書を出させてもらった時には中国の「水滸伝」について書かせてもらいましたので、今回は日本の時代小説について書かせてもらおうと思います。私は、小学生ぐらいのころから歴史に大変興味がありましたので、時代物の小説を特に好んで読んできました。特に、戦国時代ぐらいの内容のものが大好きでした。その中でも特に好んで読んでいた作家の一人である藤沢周平先生の作品をいくつか紹介させてもらいたいと思います。藤沢周平先生は、江戸時代を中心とした武士や庶民の生き方に焦点を当てた作品を多く書かれています。中心人物は、決してその時代の権力者や主役を張るような人達ではなく、武士であれば下級武士の日々の生きざまや喜び、悲しみなどを上手に描写されています。藤沢周平先生の生い立ちを紹介すると、先生は山形県出身で最初は中学校の教員をしていましたが、その後結核にかかり教員を辞めて新聞記者になり執筆活動に専念するようになりました。そして、１９７３年に「暗殺の年輪」で第６９回直木賞を受賞することとなったのです。この頃の作品は、非常に重たいものが多く、本人も「私自身当時の小説を読み返すと、少少苦痛を感じるほどに暗い仕上がりのものが多い。男女の愛は別離で終わるし、武士が死んで物語が終わるというふうだった。ハッピーエンドが書けなかった」（転機の作物）と語っている。確かに、作品を読んでみると晩年のユーモアを交えた作品とはまた違った出来になっており、同じ作者が書くものでもこうも違うのかと考えさせられるものである。

藤沢周平先生の作品は、既に映画化されたものも数多くあり、また、テレビドラマでも多くの作品が放映されているので、既に周知の方もいらっしゃると思いますが、ここで先生の作品をいくつか紹介させてもらいたいと思います。まず、若い学生にも興味を持ってもらえそうな作品として映画化されたものを紹介したいと思います。中でも一番に興味を持ってもらえそうなのが、木村拓哉主演で映画化された「武士の一分」です。原作は、「隠し剣秋風抄」に収録されている「盲目剣谺返し」で松竹映画として歴代最高配給（当時）を記録したものです。内容は、江戸時代海坂藩の下級藩士の話です。主人公は、藩の毒見役を務める三村新之丞で妻の加世と幸せに毎日を過ごしていました。しかし、毒見の最中に毒に中り失明してしまうことによって、その後の生活が一変してしまいます。それでも、加世と支えあい日々を平穏に過ごしていました。ここで、島田藤弥という藩の重役が登場し、加世に家禄のことで脅しをかけ弄んでしまいます。このことを知った三村新之丞は、加世を離縁し、島田藤弥に対して「武士の一分」をかけて果たし合いを行います。島田藤弥は剣の達人であり、三村新之丞は盲目という状況の中で秘剣が炸裂します。果たし合いの後、加世のいない家で静かに暮らす三村新之丞はお手伝いさんを雇います。そのお手伝いさんは・・・、という物語になっています。下級武士であっても「武士の一分」を貫き通すために命をかけて戦うところにこの物語の醍醐味があると思います。所々に、ユーモアのある表現もあり非常に面白い作品です。

次に紹介するのは、真田広之主演で映画化された「たそがれ清兵衛」です。主人公の井口清兵衛は、家の借金を返済するために仲間との付き合いを断り、仕事が終わるとまっすぐに家に帰り内職に励む毎日を過ごしています。そんな井口清兵衛を人々は、たそがれ清兵衛と呼ぶようになります。清兵衛には、あこがれの女性である朋江という女性がおりお互いに想いを通じ合わせているのだが、自分の身分の低さや貧しさのために身を引いてしまう。その後、藩より藩に対する謀反人を誅殺するように命令が下り、命をかけて果たし合いを行います。そして、傷だらけの身体で果たし合いを務め朋江の元へと駆けつけ・・・、という物語です。この物語も、下級武士の必死の生き方、女性に対する愛と身分との葛藤など非常に興味引かれる作品です。藤沢周平先生の作品は、他にも名作がまだまだあり、テレビドラマでは「腕におぼえあり」や「蝉しぐれ」などがあります。

藤沢周平先生の作品は、主人公が身近な存在であり、その分その主人公の喜びや悲しみ、悩みなどが自分自身にも通じるものがあり、読んでいて楽しくもあり考えさせられるもののある作品となっています。学生諸君も、ぜひ一度藤沢周平先生の世界に浸ってもらいたいと思います。

◆◆平成22年度ブックハンティング（夏季）の報告◆◆

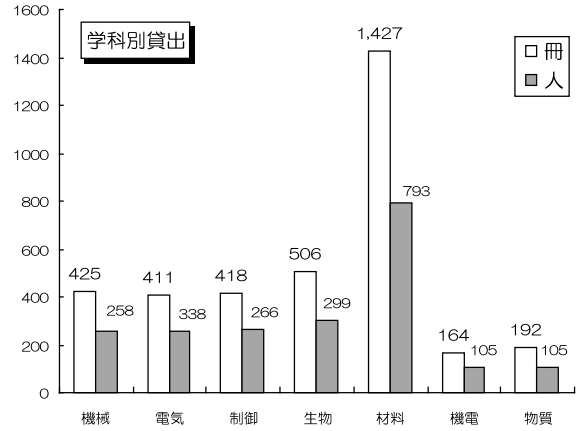
下の写真は、７月２０日（火）、紀伊国屋書店（久留米ゆめタウン２F）でのブックハンティングの様子です。冬季においても１２月２７（月）、同店にて実施します。ブックハンティングは例年夏季と冬季の２回行われております。参加者は、ホームルームや図書館掲示板を通して募集したり、図書委員に直接依頼したり様々です。興味を持った方は、クラスの図書委員に相談したり、参加者募集のアナウンスに注意しておいてください。

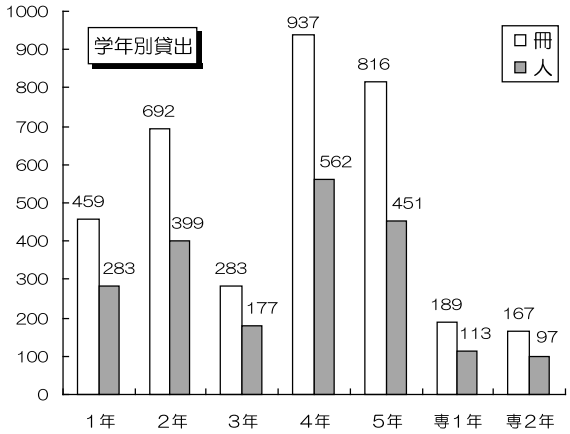
ブックハンティングで選んだ本は、1ヶ月ほどで図書館に入ります。
現在は図書館内にブックハンティング選書コーナー（表紙の写真参考）を設置していますので、
今回のメンバーのハンティング成果を是非見に来てください！！
面白い本が並んでいますよ。

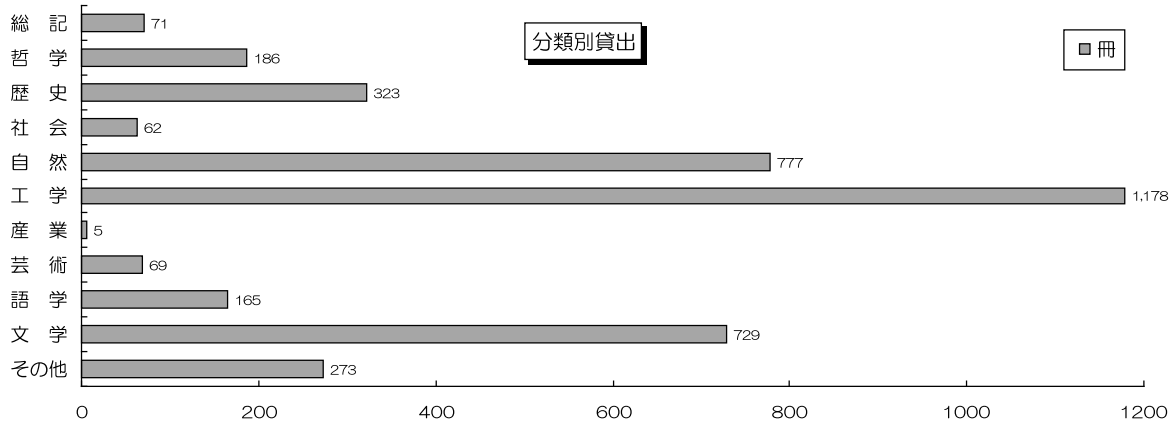
平成22年度前期　図書館利用状況

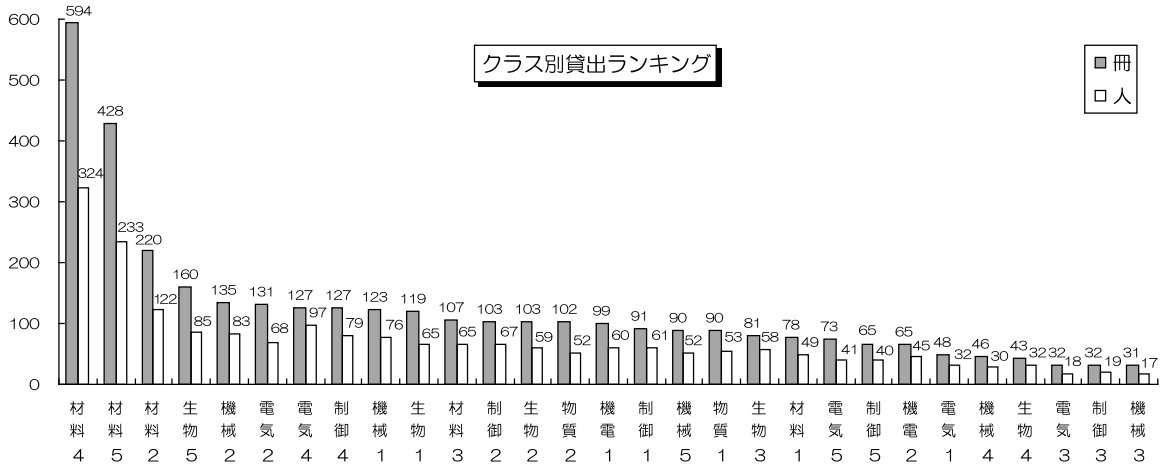
◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数 平日 時間内	入館者数 平日 時間外	入館者数 土曜日	入館者数 合計	一般利用者数（内数）	一日平均入館者数（四捨五入）	開館時間
4	24	3,369	404	167	3,940	32	164	※平日（時間内）9時～17時
5	23	3,634	660	321	4,615	24	201	※平日（時間外）17時～20時
6	26	3,671	1,029	295	4,995	27	192	※土曜日 9時～17時
7	24	3,001	331	157	3,489	22	145	※夏季休業期間 9時～17時
8	21	1,726	49	0	1,775	19	85	
9	24	3,135	773	403	4,311	17	180	
合計	142	18,536	3,246	1,343	23,125	141	163	









Information

下記のとおりお知らせいたします。開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。

◆特別（長期）貸出について

冬季休業期間中の特別（長期）貸出を下記のとおりです。

・貸出期間：１２月１７日（金）から１２月２７日（月）まで
・返却期日：　１月　７日（金）
・貸出冊数：５冊以内
（一般利用者及び教職員は通常貸出です。）

◆卒業・修了予定者への貸出等について

今年度卒業・修了予定者への貸出は下記のとおりです。

貸出：２月２５日（金）まで　　返却：３月４日（金）まで

◆開館時間の変更及び休館日について

冬季休業及び年末年始は下記のとおりです。

１２月２２日（水）　９時～２０時
１２月２３日（木）　休館（天皇誕生日）
１２月２４日（金）　９時～２０時
１２月２５日（土）　休館
１２月２６日（日）　休館
１２月２７日（月）　９時～１７時
１２月２８日（火）～１月４日（火）　休館
１月　５日（水）　９時～１７時
１月　６日（木）　９時～２０時
以降、通常どおり

◆◆図書館からのお願い◆◆

図書返却日は厳守　　飲食物の持込禁止
携帯電話は使用禁止　　騒がしい行為・会話は禁止

《編集後記》

後期中間試験の採点と、図書館だよりの冬号の編集がようやく終わりを迎え、ほっとしている制御科の中野です。今回も、編集を通しての苦労話やこぼれ話を書くべき編集後記コーナーを、読書感想でごまかすという愚行に走る私をどうかご容赦ください。さて、前回の編集後記では、理科系でも興味が湧く理科系偉人の物語という観点で選んだ書籍を紹介しました。今回は、よりハードに、よりダイレクトに科学を扱ったものを探してみました。

紹介するのは、ナタリー・アンジェ著、西田美緒子訳の「ビューティフル・サイエンス・ワールド」です。著者のアンジェは、ピューリッツァー賞やルイストマス賞などの賞を受賞しているニューヨークタイムズ紙の女性サイエンスライターです。この本は、多くの人に科学の面白さを知ってもらうため、彼女曰く「見えないものを見えるように、はるか彼方にあるものをごく身近なものに感じられるように」と、科学を解説しようとする彼女のジャーナリスト魂と気概を感じさせる作品となっています。内容は、数学、物理学、化学、生物学、地質学、天文学などに分かれており、それぞれの分野において複数の学者へのインタビューを積み重ね、それらのインタビューに基づいて日常的な事象をマニアックに説明しています。

読み終わった後、科学を学ぶのは、必要だからとか、役に立つからという理由ではなく、「楽しいから、それだけ！」、こんなフレーズが自然と湧いて出てくるような感覚になりました。理科系人間の原点ともいえるこの感覚は大切にしたいですね。この冬お薦めの一冊です。

さて、私の図書館だより編集の任は、今回をもって終了となります。たった２回でしたが、赴任時から楽しく読ませてもらっていた図書館だよりの編集に携わることができたことを嬉しく思っております。文章を寄せてくださいました先生方、学生さん有難うございました。この場をかりてお礼申し上げます。今後は一人の読者として図書館だよりの発行を楽しみにしています。特に「私の一冊」を担当する学生さんには期待していますよ！

（図書主幹　中野　明）

発行日：平成２２年１２月２０日
発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館　Tel：0942-35-9306　Fax：0942-35-9206
〒830-8555 久留米市小森野一丁目１番１号　E-mail：L-staff.SAD@ON.kurume-nct.ac.jp